

ユングのアニマとアニムス

ーフェミニストの批判を受けてー

高橋容子（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：ユング、無意識、アニマとアニムス、フェミニズム

序

私たちが普段生活する中で、ふいに浮かぶアイデア、言い間違い、夜寝る時に見る夢など、理性の関わらない無意識的な活動が行われていることがしばしばある。このような無意識の活動を精力的に研究した思想家としてカール・グスタフ・ユング(1875-1961)を挙げることができる。ユングの中心的概念は「集合的無意識」であるが、その中の元型の一つ、「アニマとアニムス」については、男性中心主義的であるとしてフェミニストから批判されてきた。本稿では、フェミニストからの批判をふまえ、ユング心理学を捉えなおす試みを行う。

第1章 ユングのアニマとアニムス

第1節 フロイトによる無意識の発見

近代哲学は、デカルトの「我思う故に我あり」という概念に代表されるように、思考や感情が働く部分に「わたし」の存在が確立されると主張してきた。しかしそのような理性主体の考えに疑念を持ち、デカルト主義を根本から揺るがしたのが、フロイトによる「無意識の発見」である。フロイトは日常生活における言い間違いや度忘れなどの失錯行為、夜寝るときに見る夢などに注目し、人の心の大部分は無意識が支配していると主張した。フロイトによると、無意識は個人的な幼児期性欲であり、意識によって克服すべきものなのである。

第2節 ユングの集合的無意識

ユングは、フロイトのように無意識を個人的な欲望に限定せず、さらに深い層に、個人を超えた万人に共通な段階（集合的無意識）があるとした。集合的無意識は、非個人的なものであり、古代から継承されたものである。集合的無意識を発見することにより、ユングは「わたし」＝自己という内的存在を、意識、個人的無意識、集合的無意識という三つの層に分けたのである。

さらにユングは、この集合的無意識の中に存在し、意識にイメージを与えるものとして、「元型」が存在するとした。元型も、集合的無意識と同じように非個人的、遺伝的であ

る。古代から受け継がれる集合的無意識により、人間には一定のイメージのパターンが存在し、体験のパターンも似ている、または同じであるということができる。ユングは夢にあらわれるシンボルからその普遍的なイメージを探し、集合的無意識の世界を探求していった。

第3節 ユングのアニマとアニムス

ユングは、集合的無意識の中の元型のひとつとして、アニマとアニムスの概念を提示した。アニマは男性の集合的無意識の中にある女性像の元型であり、女性らしさを担う。それと対照的に、アニムスは女性の集合的無意識の中にある男性像であり、男性らしさを担う。これは意識と無意識が補償関係にあるためである。

アニマとは、男性の無意識内の一人格であり、常にある一人の女性に投影されている。その人物は自分にとってもっとも影響力を持った異性であり、最初は母親、そのあとはその人に深く関わる女性とされる。ユングによると、女性は男性にはないインスピレーションや、個人的なものに対する細やかさを担っている。

アニムスとは、女性の無意識内に存在し、男性的性格を持つものである。常に自分に近い存在の女性に投影されているアニマと違い、アニムスは一人の男性に投影されるのではなく、「父親たちおよびその他の諸権威の集合体のようなもの」[ユング,1982,p.141] に投影される。これはいわゆる一般的な真理や正義、理性の規範と呼ばれるものである。

第2章 フェミニストの観点から見たユング

第1節 様々なフェミニストの考え方

フェミニストは政治、経済、宗教などあらゆる分野において男性中心主義からの脱却、性差別の撤廃を目指し活動を続けている。しかしフェミニストの中でも様々な立場があり、特に男女の違いが生得的なものによるものなのか、それとも社会的に作られたもののみによるものなのかについては、いまだに決着がついていない。男女の違いには生得的なものもかかわっているとする立場は「生得的差異派」と呼ばれ、男女の違いに生得的な違いは一切なく、社会的

に作られたもののみが作用していると考える立場は「社会的構成派」と呼ばれる。

第2節 社会的構成派によるユング批判

社会的構成派のフェミニストは、男女の生活や行動様式、心の違いは、親を含めた周囲の教育によって、社会的に作られたものであると主張する。彼らに言わせれば、ある生まれもつての人格の特徴を男性的である、もしくは女性的であると決めつけること自体が男女差別の普遍性を広めていることになるのである。ユングは集合的無意識の段階から男性と女性を区別しているため、社会的構成派のフェミニストの批判の対象となる。

第3節 生得的差異派によるユング批判

生得的差異派のフェミニストは、男女の心の違いは生まれつき違うものであると主張する。しかし生得的差異派に属しながら、ユングを批判するフェミニストもいる。なぜなら、ユングの「女性的なもの」の定義、女性の自我に対する考え方、そしてアニマの単数性・アニムスの複数性の三点について、ユングの描き方は家父長制に影響されており、男性中心主義的だからである。

第3章 アニマとアニムスの概念の見直し

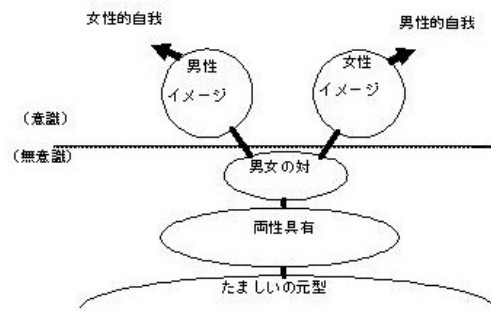
第1節 アニマとアニムスの概念の新しい捉え方

ユング心理学が男性中心主義的に描かれているのは第2章で検証したとおりであるが、このようなフェミニストの視点からの批判を受け、アニマとアニムスに対する新たな解釈も現れてきている。その中でも特に重要だと思われるのは、アニマとアニムスを別個の元型としてではなく、一つの元型、すなわち「たましいの元型」として捉える河合隼雄の考え方である。

河合によれば、集合的無意識内にあるアニマ・アニムスは、二つ併せて「たましいの元型」であり、両性具有、つまり男でもあり女でもあるという心の状態である。「たましいの元型」は、意識と無意識の補償の原理により、意識が男性的であれば無意識内に女性イメージを生じさせ、意識が女性的であれば無意識内に男性イメージを生じさせる。こうなると、無意識の人格にはそれぞれ男性・女性という区別が存在しないことになり、自我、つまり意識における男女の違いによって、無意識内に男性イメージもしくは女性イメージを生じさせるのである。(以下に河合隼雄による「たましいの元型」の図を挙げる。)

河合は、「アニマに関するユングの論を調べてみると、後になるほど、アニマとして語るよりは、対元型として提示し、それによってアニマを語っていることが多いのに気づく」[河合,1991,p.137]と述べる。ユングはアニマを語る際に、次第に無意識内の男性・女性の区別を取り入れなくなっているのである。はじめは男性・女性の区別を元型的に定義したユングも、次第に両者を一つの元型と捉えるよう

になっていたと考えられるのである。



[河合隼雄,1991,p.138]

第2節 個性化

ユングの集合的無意識の概念を発展させたものの中に、「個性化」という概念がある。個性化とは自分自身の本来的自己になることであり、「自己実現化」とも言える。ウェーアは、この「個性化」のプロセスの中には、男女の区別が存在しないことを指摘する。ユングは個性化のプロセスを、男女の違いを超えた普遍的なものとして考えたのではないかというのである。「たましいの元型」と同じく、ユングは男女の生得的差異を思われるほど重要視していなかった可能性がある。

第3節 生得的差異の否定とジェンダー・フリー

「たましいの元型」によって無意識内の男女の生得的差異は否定される。しかしここから、意識、つまり自我についての生得的差異が否定されるわけではない。意識領域において男女の違いが生まれつきであるか社会的につくられたものであるかは未だ議論の余地がある。

また、差異の否定に関しては、ジェンダー・フリー教育批判という形で否定する論者もいる。この点に関しては今後も議論していく必要がある。

結

本稿では、フェミニストによって批判の対象とされてきたアニマ/アニムスを、河合隼雄の「たましいの元型」という考え方をとり入れることにより、生得的差異を否定する立場を提示した。しかし、生得的差異のあり方にも影響を与える社会的に構築される面に関してはほとんど議論ができなかった。この点に関しては今後の課題としたい。

主要参考文献

- C. G. ユング『自我と無意識の関係』(野田倬訳), 人文書院, 1982年.
- C. G. ユング『元型論(1)—無意識の構造』(林道義訳), 紀伊國屋書店, 1982年.
- D. S. ウェーア『ユングとフェミニズム—解放の元型—』ミネルヴァ書房, 2002年.
- 河合隼雄『とりかへばや、男と女』, 新潮社, 1991年.